

『坪井清足先生卒寿記念論文集
－埋文行政と研究のはざまで－』
平成22年11月発行
坪井清足先生の卒寿をお祝いする会

茨木キリシタン遺跡発見90周年

—茨木キリシタン遺跡の成立に関わる「フロイス日本史」清水寺口ケの実像—

井 藤 晓 子

茨木キリシタン遺跡発見90周年

—茨木キリシタン遺跡の成立に関わる「フロイス日本史」清水寺口ケの実像—

井 藤 晓 子

1. はじめに

キリスト教やその信者など関連のものは含めてキリシタンと呼ばれる。キリシタン時代とは、戦国時代から江戸時代前期前半、1540年代から1640年頃に至る約100年間、ポルトガル、スペインを中心にキリスト旧教国の人々が貿易や布教のため、我が国に来港した時代を云う。キリスト教は『完訳フロイス日本史』では、キリシタン信仰と訳される(松田毅一・川崎桃太訳2000)。

大正年代、大阪府茨木市の山間部に位置する千提寺、下音羽の2集落から、キリシタン墓碑をはじめとして、キリシタン時代信仰遺物の存在が次々と公表された。とくに有名なものは、現在では神戸市立博物館所蔵になっている「聖フランシスコ・ザビエル像」(重要文化財)である。遺物所蔵家である千提寺の三老女(天保5~8(1834~37)年生)がキリシタンの教えを伝承していたこともあり、この地での信仰宗団の在り方が推測できるようになった。

両集落は、貞觀年間(859~77)の創建伝承をもち、平安時代末期に御室仁和寺末となつた真言宗忍頂寺を中心とする五ヶ庄に含まれる。五ヶ庄は、天正6~13(1578~85)年の足かけ8年間、戦国時代のキリシタン大名として有名な高槻城主高山右近(1552~1615)の加領地となつた(図1)。これが、キリシタン集落の成立の歴史のはじまりである。

現在、我が国では、九州を中心に近世以降の禁教期においても信仰を守り続けてこられたカクレキリシタン集落が知られる。長崎県生月島など、キリシタン時代から続く信仰と集落行事が現在も守られる地域がある。キリシタン時代の遺物についても長崎奉行所旧蔵品、大分県丹生台地小原地区出土品、備前福井医家伝来資料、水戸藩徳川家収納品、慶長遣欧使節関係資料など貴重な伝世品が知られる。しかし、本例のように、政治の中核地・都の教会に含まれる地域において、数多くのキリシタン時代の優品遺物を、集落に信仰が入ってきた当初、および禁教

期における信仰集落組織を彷彿させる形で保持されてきた例は、現状では知られていない。

近世元和年間(1615~24)から表面的には改宗者の装いを借りた「特大級のキリシタン時代から続く信仰集落」が、高槻城下ではなく、高山家自領高山莊(現・大阪府豊能郡豊能町。もとは勝尾寺3莊園の一つであった)に近い、「フロイス日本史」で高槻山間部と呼ばれた茨木山中に確認されたのである。

遺跡公表の契機となった藤波大超氏のキリシタン墓碑発見は大正8(1919)年、続いてザビエル像をはじめ約30点のキリシタン遺物が入った「開けずの櫃」が発見されたのは翌大正9(1920)年。昨平成21(2009)年から本平成22(2010)年にかけて「茨木キリシタン遺跡発見90周年」記念の年を迎えたことになる。

そして、今、千提寺は1500年代から保持されてきた景観・生活環境大激変の時を迎えていた。新名神道路が集落の中心部を二分する形で通過するからである。インターチェンジ、関連施設、アクセス道路などで、千提寺の古い耕作地、キリシタン信仰が入ってくる前の墓地(墓の丸)を含む古い墓地の大半、さらにキリシタン墓碑発見地のクルス山先端部でさえ失われるという。

以下、本当に遅まきながら、遺跡の歴史を明らかにする史料を今後の研究基盤として蓄積していくたいと考え、勝尾寺(現・箕面市)が所蔵する高山莊の、また、地元車作に残る仁和寺末忍頂寺の莊園でもあった五ヶ庄の、以上2件のキリシタン時代前代(中世末期)史料を再確認し、再紹介させていただくことにした((財)大阪府文化財調査研究センター1999参照)。

いずれも年貢台帳、名田・名主書上文書という簡単なものである。ところが、両史料を対照し、関係資料・史料を参考にすると、千提寺・下音羽のキリシタン集落成立の経緯とともに、近世禁教期を通じての千提寺の歴史につながることがわかりだした。

とくに、今回、「フロイス日本史」で2カ所に紹



図1 忍頂寺五ヶ庄位置図

(財) 大阪府文化財調査研究センター 1999より転載)

介された「清水寺のロケ」の実像ではないかと思われる人物も特定できたようである。

彼は、のちに千提寺の庄屋となった乾家につながる家筋にあった。

2. 千提寺、下音羽の地域史概要

千提寺は五ヶ庄のうち寺邊村に、下音羽は音羽村にある(図2)。所属村は違っても両集落は「フロイス日本史」がキリスト教になったと記す忍頂寺、清水寺がある竜王山に接する膝元集落である(図3)。

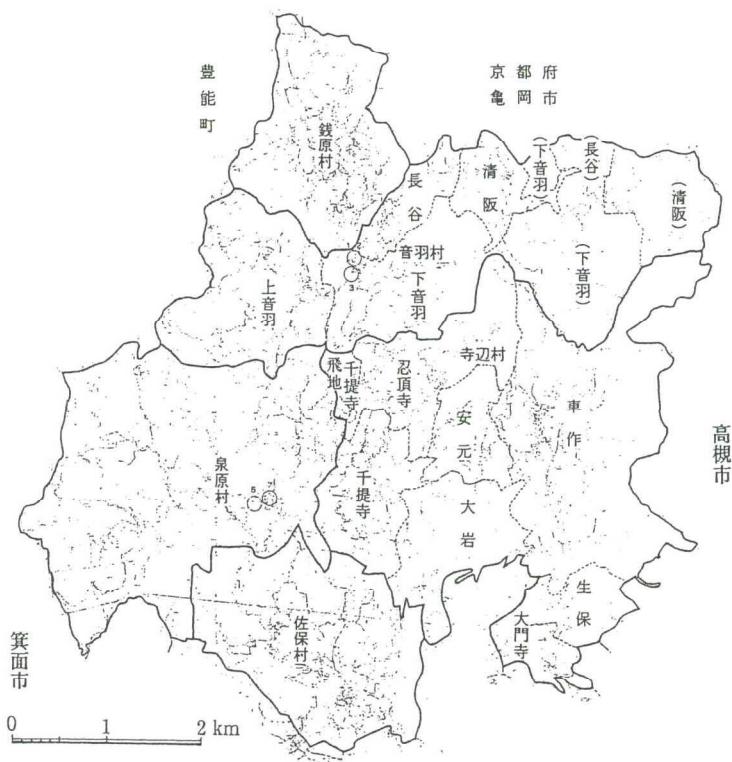


図2 忍頂寺五ヶ庄村落配置図

(財) 大阪府文化財調査研究センター 1999より転載。一部加筆)

(1) 戦国時代

高山右近は、天正元(1573)年に高槻城主となる。右近の領地は、高槻、自領高山庄とは別に2回にわたり拡大する。1回目(天正6(1578)年)は対荒木村重戦で織田信長から五ヶ庄を、2回目(天正10(1582)年)は山崎合戦の功で織田家宿老衆より能勢の郡のうち3,000石(現・大阪府豊能郡豊能町か)を加増された。天正13(1585)年、秀吉のため明石に移封となる。

その後、五ヶ庄は豊臣家直轄領になり、茨木城管轄下に置かれた。初代代官は安威了佐(キリシタン。在職1586~93)であった。2代目川尻肥前守秀長(同~1600)は、イエズス会士書簡では異教徒とあるが、秀吉家臣で、美濃国苗木城主でもあったという(村田路人氏の教示による)。

右近はバリニヤーノに願い高槻にイエズス会司祭たちを定住、了佐はオルガンティーノに願い高槻山間部にも司祭を定住させてもらったという。

(2) 德川幕府の時代

茨木城代官は、関ヶ原の戦い以降、慶長6(1601)年には徳川方にかわる。元和元(1615)年に一国一城令が出たが、同4(1618)年に完全廃城となる。

高槻も徳川幕府直轄地になる。慶長9(1604)年、高槻本山寺に京都所司代板倉伊賀守勝重(在職1601~19)の安堵状が伝わる。右近旧領における京都所司代の目配りがはじまる。京都所司代は、京都諸役人の統率、町方の取締、朝廷・公家・都以西の大名家に対する監視役として、徳川幕府の重要な職である。

慶長19(1614)年、徳川幕府禁教令のため、宣教師や高山右近らは、マカオ、マニラへの大追放。以降、キリスト教徒は表面は仏教徒でないと生きていけないカクレ(潜伏)キリスト教となる。

元和5(1619)年、勝重の息子周防守重宗が父の職を継ぐ(在職~1654)。下音羽の村寺に千提寺を含めたカクレキリスト教徒が檀家としてまとめられ現在に至っているが、この禅宗曹洞宗高雲寺が意図的に創建されたらしい年頃である。我が国に伝わるのは遅れるが、1619(元和5)年にザビエル列福、1622(元和8)年にはイエズス会創立中心者イグナチウス・デ・ロヨラとともにザビエルも列聖される。千提寺には、名前の頭に「S.」が付された(聖父か、聖人の意か)ザビエル像、同様、千

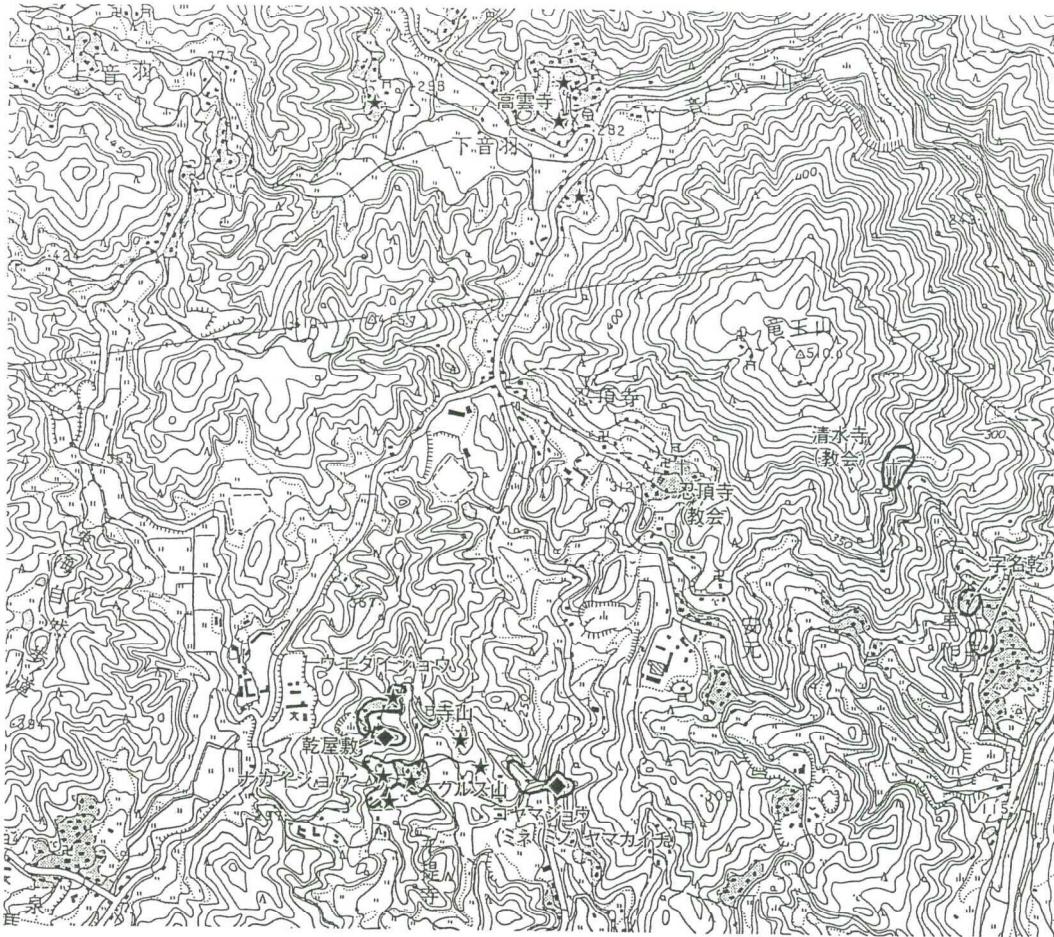


図3 大阪府茨木市千提寺・下音羽キリシタン関係図 ★キリスト教時代遺物確認地 十キリスト教時代の教会 ◆庄屋
(1:25,000地形図 高槻 平成14年4月1日国土地理院発行に加筆縮小)

千提寺と下音羽に計2枚のマリア十五玄義図が確認されているが、これらは、元和8(1622)年以降でも密かにキリスト教徒が活動し、教会関係者が当地に巡回ないし滞留したことを示す。これら動静を探り、かつ、問題の無いようにおさめるのも京都所司代の職務の一つであった。

寛永10(1633)年、下音羽に潜んでいた司祭たちが淀川で捕縛され大坂の奉行所から長崎送りになり刑死という、古くは姉崎正治東京帝国大学附属図書館初代館長の指摘がある(西村貞1958 p.11~12)。後世、寛政9(1797)年に備後福山藩士太田経方がまとめた「契利斯督記」のうち「吉利支丹出申国所之覚」(明暦4年調査)に「永井日向守領分、高槻ヨリ宗門十人許モ出申候」、とくに、「板倉周防守領分、下音羽村ヨリ宗門多出申候」(国書刊行会編1970 p.643)と記すのは、本事件を指すのか。この寛永10年、高山庄を含めた五ヶ庄は、直接的に板倉重宗の役知となる。のち、慶安2(1649)年から、五ヶ庄所属村は、順次、高槻城主永井直清家領に変わる。

重宗の京都所司代職後任牧野親成は、明暦年代

(1655~58)に下音羽村宗門不定者(寛永10年事件で嫌疑を直接受けなかった者か)病死の際、葬式はキリスト教徒の替儀がなかったこと、重宗が本地域でキリスト教徒悉皆調査を行った帳面を預かるのでこの件を付載したと高槻藩に報告している(牧野親成書状303 高槻市史編さん委員会1974)。この時のものと同趣旨と思われる明暦3(1657)年墓碑が千提寺にも残る。親成の行為は、のちの類属改めに繋がるようである。幕府のキリスト教治世策を整えるため、板倉重宗が本地域で動いていた例としてあげられよう。

千提寺旧墓地に残る早い改宗家の仏教石碑年代は、上記明暦3年墓碑を除けば、1700年代後半が多い。キリスト教徒取締に関する断片史料は1800年代に散見する。文政11(1828)年の高槻藩役人来所時の佐保村「宗旨人別御改諸入用帳」(奥野慶治1935 p.35)、また、「文政十三(1830)庚寅年切支丹異法改御仕置六人別記」の記載(栗生岩阪永久寺記録 奥野慶治同 p.33)、弘化4(1847)年に千提寺で類属改帳を高槻藩に提出したらしき記載のある勘定帳が残る(個人蔵)。千提寺遺物所蔵家の中には、安政3(1856)年の

葬式に高槻藩役人が検視にきたので、こわくて紙類（キリストの本や御影）はすべて焼却の伝承をもつ家がある（奥田康雄1975 p.15）。

慶長10(1605)年摂津国絵図では千提寺村が二つに分かれる。これは後述のナカイジョウとウエダイジョウの可能性も強い。近世後半の庄屋は2軒がある。西の庄屋は、後述車作文書記載乾大夫の一統が続く。東の庄屋は箕山家で、寛政2(1790)年の「田畠屋敷名寄帳」（板倉氏検地の写か）を所蔵されていた（奥野慶治同 p.49）。

(3) 近代以降（藤波大超氏による遺物発見まで）

明治6(1873)年、新政府によりキリスト教禁制の高札が撤去される。明治11(1878)年頃、大阪川口教会で千提寺の婦人が、昔はキリストだったと打ち明ける。宣教師はすぐに探索に行ったが、どうしても聞き出せなかった（松村菅和・女子カルメル修道会誌1999 p.264）。そして、現在よく知られる藤波大超氏のキリスト教遺物発見ということになる。

(4) キリスト教信仰に関する伝承

茨木カクレキリスト教はどのような信仰を守っていたのか。大正8～9(1919～20)年の遺物発見後の聞き取り調査がある。以下は、カクレキリスト教時代の伝承であるが、昭和30年頃まで聖母子像を拝みお供えするなど個人的に守られた関連事例もあった。

外面は改宗家として高雲寺の僧による葬式をした。しかし実際には天井裏・部屋（納戸）隅の長押などに小棚を祭壇とし、深夜にオラショを唱えた。キリスト教暦が無いので、春ツバメが来る頃に30(48とも)日間、入りから開けの日までは二食、開けの日に風呂で身を清め、「お縄にかかる」といって鞭打ちの行をし、鶏肉などで精進落しをした。寒が明けると仏様（キリスト、マリア）に餅を供え、同信の家を拝んで廻った。この時、厩には赤飯を供えた。七日ごとの「お茶日」に集まり、祈りを唱えたり、ご馳走を食べたりした。洗礼は子供が生まれるとオスチャと呼ぶ容器に水を入れマリア様に供える。それをいただいて、中指に紙を筒の形にして巻き、この水を浸して額に押印。これを「御判をいただく」という。教名は付けたが、表向きは使用しない（奥野慶治1935 p.33～34）。大正13(1924)年、パリ外国宣教会ビロース神父の調査では、三老女のうちの一人が1600年再版キリスト教版『ドチリナ・キリスト』の多少言葉が変形した「アベマリアの祈り」を唱えたという（奥田康雄1975 p.15・16）。

カトリックの主要教義は、少し形を変えながらも守られ、伝えられていたのである。

3. 高山右近キリスト教布教の前代史料

茨木キリスト教集落成立を考えるため前代史料に注目したのは、千提寺・下音羽の遺物所蔵家の姓（名字）が高山荘納帳の姓に通じるという指摘のためである（H. Cieslik S.J.1976 p.105）。

その後、五ヶ庄に残る名田・名主書上文書（以下、「車作文書」と仮称）も同様、記載の名主名が該当村の古い居住家と共に通する場合が多いということがわかってきた（井藤暁子1999-2）。

(1) 2史料の概要

高山荘納帳は、高山荘が地請けで勝尾寺に納めた年貢台帳である。秋に収穫した年貢を翌年の8月1日に勝尾寺預所が注進して終了するという形式を取りている。各台帳は、したがって、永正元～天文13(1504～1544)年収穫の年貢高をあげる（最終注進年は天文14年）という作成年号が明らかである。これには年貢高と貢納家名だけが記される。

車作文書は、車作の古い居住家に伝わる中世文書（写）で、五ヶ庄中の寺邊・音羽・泉原の3村分が残る。村名項が「○○村名主中」と続き、各村に居住の名主を主体に、年貢収納単位である名田名が記載される。年号は記載がない。両史料の年代は重なるだろうし、作成については車作文書の方が新しい年代までという教示もある（井藤暁子1999-2 p.306～307）。すなわち、車作文書は年代幅があるようで、中世、1500年初頃から右近検地や太閤検地頃までの状況を示す文書のように思える。

また、五ヶ庄集落のうち千提寺・下音羽は、高山荘納帳に共通する姓がとくに多い点で高山荘との関係も云々したいが、現在、周辺部右近旧領地域にも高山荘納帳と同姓の古い居住家が見られる。これらは、のち高山荘から他村に移住したという考えが現代の研究者では一般的のようである。対して、どこにでもあり得る姓が多いだけという考え方もある。

さらに、次の指摘がある。高山荘納帳と同様の年代、永正12(1515)年11月に作成された木代荘（現・豊能町）の年貢台帳「木代荘田畠年貢等注進状」では、貢納家に「抱」（田畠の所有者）と「作」（耕作者）の2種が明記される。「抱」の場合も、本来の居住者とは別に、周辺部名主家の一族の者が移住してきたり、「作」の場合は、当荘の住人ではない家

が本荘の耕作地を買得、あるいは加地子得分権だけをもっているというだけの場合などが推測されている（田中文英1987 p.221・234～35）。

今回の両史料にも、木代荘同様、当時の有力農民層が惣結合的な力を蓄え、とくに高山氏を中心とする高山荘との地域間交流を深めていった情勢が写し出されていると考えられる。以下、推測に頼りながら、高山荘と、五ヶ庄千提寺・下音羽との関係を再確認することにした。

（2）高山荘納帳の表化 (表1-1～3)

本納帳は、単年度毎に、足らなければ紙を継ぐ一紙形式で記載される。台帳として綴じられるわけではない。

『箕面市史』第1巻では17年分が残るとあったが、その後『箕面市史』(史料編二)で翻刻が掲載され、台帳は23史料であることが確認できた。うち2史料が同一のものと判明、合計22年分が残ることがわかった。『箕面市史』では各納帳に史料番号が付されているが、間に別種の文書も入る。したがって、本稿では高山荘納帳として登録された年度順にNo.1～22の番号を付与した。ただし、秋本年貢納入家を主体に表化したので、この記載部分を欠失する2年分(No.5、No.9)は除外し、20年分の変化を追うことになった。

また、表化については、記載された貢納家の順に固有番号を与えた。1年度内に複数の同名が記載された場合は、耕作地が複数箇所にあるのかなどの内容は不明があるので、一応、別番号を与えた。

さらに、毎年、収穫高は変わり、年貢高も変わる。原表では1年分の年貢高順位を付記し、検討した。

（3）車作文書の翻刻 (翻刻) 車作文書

寛延3(1750)年の近世文書と一緒に、掛軸の空きに合わせ、横長に続く文書を縦16～17cm、横幅47.7cmに切断、2段に重ねて貼り込まれたものである。

寺邊村は全体、泉原村も記載が泉原川の川筋周辺と東垣内の範囲を超せず、その間の泉原城・泉原氏を中心とした区域は除外されていることから、泉原村の忍頂寺への貢納家全体が記載された可能性は高いと思われる。音羽村は途中行の真中で縦断されたために、次の段にその半分が続くのか、1～複数行が欠くなるかは不明。古い居住家を音羽村で確認すると、上音羽では、ほぼすべてが車作文書に該当してしまう。下音羽は、古い居住家との同姓は1姓しか見あたらない。下音羽は現在の居住地域から考えると戸数の変化は考えにくい。今後、車作文書と以降の

居住家の違い、とくに東姓一統の動向を確認する必要がある。現況では、寺邊村は28の名田と30の名主、音羽村23・泉原10の名田と名主の名前が残る（本稿翻刻では記載のない箇所は／で表記）。

（4）前代2史料からみた千提寺居住家

現在、千提寺は30軒余と戸数も少ない。近世期に遡る居住家は、伝承屋敷地名（転出家）を加え判明する姓は10姓ある。高山荘納帳記載は6姓、車作文書記載は4姓である。うち2姓が両史料に記載される。その他の2姓（箕山、山畠）は、現況では史料が無く不明。

以下、高山荘納帳と車作文書にみえる千提寺居住家と同姓の一統のうち、キリストン信仰集落成立当初に関係したと思われる3姓一統を主に紹介する。

①乾大夫家 まず、近世禁教期の千提寺庄屋乾大夫家の出自から検討する。現在、千提寺は3居住区（別に、幕末以降、集落南の妙見街道沿いに2居住区）に分かれ。一番高位の居住区の支丘上、中位居住区裏山にあたる小字土居山、通称ドン山（堂山）に、土居を巡らした中世末期的構造をもつ屋敷跡が現在も残り「乾屋敷」と呼ばれている。乾家は、庄屋として村人より後にやってきて、スズミダイと呼ばれる隣接高所からキリストンの動きを探っていた。加えて、村人が田植えの忙しい最中でも、シャミ

（三味線）や太鼓の音が聞こえたという伝承が残る。乾家は、表面は仏教徒であったカクレキリストンと、早くに仏教へ改宗した元キリストンの集落であった千提寺の庄屋を代々にわたってつとめ、明治27・28年頃に廃絶した。

堂山の下、千提寺の中心区域に高札場と、国見山惣道場あるいは千提寺惣道場と呼ばれた寺があった。浄土真宗（東）大谷派と奥野氏は記述されるが、（西）本願寺派の寺である。石山合戦に加担の褒美として五ヶ庄門徒に下賜された方便法身尊像の掛軸が祀られた。掛軸は、今は安元の教誓寺（浄土真宗（東）大谷派）所蔵となっている。この道場については文化13(1816)年の「九月廿六日千提寺歡了入院」（千提寺再興、僧歡了が入った意）、嘉永5(1852)年の「千提寺大破に付奉加四百目九ヶ寺軒別一匁宛」などの記載が栗生岩阪永久寺記録に残るという。しかし、乾家が道場主であったため廃絶をともにした（奥野・慶治1935 p.9・48）。

しかし、地元研究者免山篤氏は、乾屋敷跡は、地侍乾氏を中心とした石山合戦に関わる城砦がはじ

表 1-1 高山莊納帳 秋本年貢高一覽表

史料No	今回付与No 古市史No	No 1		No 2		No 3		No 4		No 5		No 6		No 7		No 8		No 9		No 10		No 11		No 12		No 13		No 14		No 15		No 16		No 17		No 18		No 19		No 20		No 21		No 22					
		元号	西暦	1034	1038	1045	1049	1053	1056	1058	1061	1062	1064	1068	1071-1069	1072	1085	1090	1091	1092	1096	1109	1111																										
姓	元号 年名	永正																												享禄		天文																	
		元	3	5	10	13	14	15	16	17	元	2	3	6	8	2	3	4	2	7	13																												
姓	元号 年名	1504	1506	1508	1513	1516	1517	1518	1519	1520	1521	1522	1523	1526	1528	1529	1530	1531	1533	1538	1544																												
		4升合夕	4升合夕	4升合夕	4升合夕	4升合夕	4升合夕	4升合夕	4升合夕	4升合夕	4升合夕	4升合夕	4升合夕	4升合夕	4升合夕	4升合夕	4升合夕	4升合夕	4升合夕	4升合夕	4升合夕																												
姓	元号 年名	秋上牛	秋上牛	秋上牛	秋上牛	秋上牛	秋上牛	秋上牛	秋上牛	秋上牛	秋上牛	秋上牛	秋上牛	秋上牛	秋上牛	秋上牛	秋上牛	秋上牛	秋上牛	秋上牛	秋上牛	秋上牛																											
		3.50	4.00	4.00	4.00	4.00	4.00	4.00	4.00	4.00	4.00	4.00	4.00	4.00	4.00	4.00	4.00	4.00	4.00	4.00	4.00																												
姓	元号 年名	1.50	1.50	1.50	1.50	1.50	1.50	1.50	1.50	1.50	1.50	1.50	1.50	1.50	1.50	1.50	1.50	1.50	1.50	1.50	1.50	1.50																											
		0.50	0.50	0.50	0.50	0.50	0.50	0.50	0.50	0.50	0.50	0.50	0.50	0.50	0.50	0.50	0.50	0.50	0.50	0.50	0.50	0.50																											
姓	元号 年名	079	播部																																														
		087	通音																																														
姓	(道善?)	041	/																																														
		049	/																																														
姓	元号 年名	167	二郎三郎																																														
		002	大夫	秋上牛	秋上牛	秋上牛	秋上牛	秋上牛	秋上牛	秋上牛	秋上牛																																						
姓	(道善?)	074	/																																														
		139	衛門二郎																																														
姓	元号 年名	145	衛門																																														
		166	馬五郎																																														
姓	元号 年名	182	/																																														
		131	/																																														
姓	元号 年名	188	馬																																														
		132	/																																														
姓	元号 年名	003	次郎	秋牛	秋牛	秋牛	秋牛	秋牛	秋牛	秋牛	秋牛																																						
		(道善?)	110	左近大郎																																													
姓	(道善?)	004	/	秋	0.60																																												
		005	治部	秋牛	秋牛	秋牛	秋牛	秋牛	秋牛	秋牛	秋牛																																						
姓	元号 年名	120	大夫																																														
		183	/																																														
姓	元号 年名	127	/																																														
		006	掃部	秋牛	25.0																																												
姓	元号 年名	115	大夫																																														
		153	/																																														
姓	元号 年名	185	/																																														
		190	/																																														
姓	元号 年名	007	次郎	秋牛	21.0																																												
		068	太郎																																														
姓	元号 年名	031	大夫																																														
		071	/																																														
姓	元号 年名	052	/																																														
		099	左近太郎																																														
姓	元号 年名	160	衛門																																														
		152	大夫																																														
姓	元号 年名	025	又五郎	秋	2.70																																												
		073	中屋大夫																																														
姓	元号 年名	075	/																																														
		065	/																																														
姓	元号 年名	155	又五郎																																														
		169	五郎衛門																																														
姓	元号 年名	008	大夫	秋	0.70	秋上牛	2.30																																										
		029	二郎																																														
姓	元号 年名	009	大夫	秋牛	1.40																																												
		017	/	秋牛	5.20	秋	3.00																																										
姓	元号<br																																																

NO.1・NO.2(秋:本年貢、上:上分米、牛:生飼料)

表1-2 高山莊納帳 秋本年貢高一覽表

史料No	No 1	No 2	No 3	No 4	No 5	No 6	No 7	No 8	No 10	No 11	No 12	No 13	No 14	No 15	No 16	No 17	No 18	No 19	No 20	No 21	No 22
元号	1034	1038	1045	1049	1053	1056	1058	1061	1062	1064	1068	1071-1069	1072	1085	1090	1091	1092	1096	1109	1111	
姓	名	西脣																			
単位	石斗合	石斗合	石斗合	石斗合	石斗合	石斗合	石斗合	石斗合	石斗合	石斗合	石斗合	石斗合	石斗合	石斗合	石斗合	石斗合	石斗合	石斗合	石斗合	石斗合	
中	014 大夫	秋 上 牛	2.20 0.50 0.29		2.10									2.00			2.30				
020 太夫	秋	1.30																			
022 太郎	秋	1.40																			
096 衛門														2.50		2.08		2.00	1.60		
中・中ノ	178 五郎二郎																			1.80	
擇部	015 /	秋 牛	1.10 0.19											2.75		2.70				1.50	
東	016 大夫	秋	0.70		0.84	1.30								1.20		0.80	1.20	1.20	1.50	2.00	
末(東?)	091 大夫																1.50				
千代	104 /															1.50					
橋本	170 増太夫																			2.90	
下(※2)	019 太郎	秋	1.40																		
徵事→	040 大夫													3.40	3.40	3.50	3.00	1.50	1.20	/	
	061 益米													1.70			1.0000 ※040?	0.40	3.50	1.80	2.70
下ノ	161 五郎二郎																			1.50	
下	177 左近大郎																			3.00	
中下	059 /													0.80							
中下浦	088 /														0.84					0.65	
中下ウラ																					
中下ウラ	136 /																			0.70	
中下ヲ	118 二郎三郎																				
/	021 三郎太郎	秋	10.50											5.36							
	066 三郎太郎													1.50	1.10	1.20	1.20	1.20			
法名	023 太郎	秋	0.70																		
	062 /													0.845	0.80	1.05	1.40	0.80			
高木	024 大夫	秋 上	1.40 1.50		1.50	2.90	3.00	1.30	1.40	3.00	2.20			2.20	2.50	2.15	3.00	1.00	1.30	2.00	
	027 *	秋	3.00											1.50					0.70		
	028 *	秋	1.18																		
カチヤ	026 /													0.50						1.95	
カチ屋																					
カチヤ	060 大夫五郎													1.90	3.40	1.40	1.70	0.48			
鍛冶屋	097 大夫																1.03	1.90	1.00	2.00	
神主	032 /													0.50	1.50						
井トコイ	033 大夫													2.50	0.50	0.90	2.25	1.40		2.20	
イトコイ																					
イトコイ	154 /																		1.50	2.00	
(※久)	034 □新二郎													(久)							
高山方	035 /													17.225		19.8	6.10	1.60.00			
	036 /														(久)	2.00				5.00	
/	037 二郎三郎													129.00	8.00						
	048 *													3.97	3.10						
	051 *													2.72							
小畠	039 大夫													13.0	0.85	0.85	0.70	0.80	0.82.5		
	050 *													3.20				1.50	2.30		
	140 /																		1.50		
北	150 五郎次郎																		1.60	0.90	
	043 大郎													25.4					0.70		
	100 大夫五郎																				
北浦	057 大夫													5.28		1.20					
此(北)ウラ	113 五郎二郎																				
北浦	173 二郎三郎																			3.60	
/	045 衛門大郎													1.64							
少路	046 大夫													1.00	2.30	2.30		2.20			
(小路)	053 /													2.39							
辻	047 大夫													1.00	3.40	5.00	1.30	2.04.5	2.12		
	056 /													1.20							
	089 大郎																0.77.8	2.29	(大夫?) 2.04.5		
	114 二郎四郎																			2.17	
	163 二郎三郎																			1.57	
/	172 次四郎																			2.94.5	
西浦	054 大郎二郎													2.00							
西ウラ	122 衛門三郎																				
西うら																					
西浦	162 三郎																			1.50	
	165 馬																			5.00	
	174 右馬																			2.00	
西	107 大夫																				
/	137 衛門三郎																				
小吹	064 大郎次郎													2.00			1.00	1.00	3.40		
	077 大夫二郎																2.30	2.30	2.0.0		
	090 松若													2.30	2.32	2.32					
	103 大良(?)													0.83	2.25						
	108 大夫																1.00	2.20	3.40		
	112 中大夫																2.60				
	124 馬																1.50		3.00		
	125 滋郎																1.50	1.50		2.25	
小吹	128 右馬																				
コフケ																					
小吹	187 大五郎																			2.10	
	189 五郎二郎																			0.80	
式(城)事	092 /													0.41.5						2.00	
	093 /													0.55							
式事	148 衛門																5.00				
式仕	149 衛門既で納入																3.00				

表 1-3 高山莊納帳 秋本年貢高一覽表

史科No	今回付No.	No 1	No 2	No 3	No 4	No 6	No 7	No 8	No10	No11	No12	No13	No14	No15	No16	No17	No18	No19	No20	No21	No22		
	並面史No	1034	1038	1045	1049	1053	1056	1058	1061	1062	1064	1068	1071-1069	1072	1085	1090	1091	1092	1096	1109	1111		
	元号																						
	西暦																						
	姓	No	3	5	10	13	14	15	16	17	元	2	3	6	8	2	3	4	2	7	13		
	単位	1504	1506	1508	1513	1516	1517	1518	1519	1520	1521	1522	1523	1526	1528	1529	1530	1531	1533	1538	1544		
	石斗升合タ	石斗升合タ	石斗升合タ	石斗升合タ	石斗升合タ	石斗升合タ	石斗升合タ	石斗升合タ	石斗升合タ	石斗升合タ	石斗升合タ	石斗升合タ	石斗升合タ	石斗升合タ	石斗升合タ	石斗升合タ	石斗升合タ	石斗升合タ	石斗升合タ	石斗升合タ	石斗升合タ		
	134	赤五郎斯門																					
	156	タ																		2.4.0			
	157	タ																		3.0.0			
	158	タ																		6.9.0			
	143	赤五郎斯門																		2.2.4			
	下司職	101	/																	1.8.85.0			
	政所	179	/																				
	治部	070	/																		3.1.5	5.0.0	
	八、馬場 馬庭 場々 ハ、	121	大夫																				
	林	126	タ																	1.3.0			
		127	/																				
		133	二郎																	0.8.0			
		135	*																	0.8.0			
		147	二郎三郎																	1.6.0	0.6.6		
		130	大夫																	5.0.0			
	ユリ ムリノ ユリノ ムリ ユリ	138	二郎五郎																	5.0.0			
		081	二郎五郎																				
	九畠	151	五郎二郎																				
	木下	175	大夫																		1.6.0		
	木ノ下	186	/																		1.8.5	1.5.0	
	上房	176	/																		2.0.0		
	新屋	164	衛門																		1.8.7	2.9.0	
	新方	181	/																		1.5.0		
		069	左衛門																				
		072	大夫五郎																	3.9.5	4.5.6	1.5.0	
		082	新藏																	3.2.0	1.2.0		
		084	大郎																				
		094	大郎二郎																				
		102	藤内																				
		117	火五郎大夫																				
		119	衛門四郎																		2.4.0		
		123	大夫三郎																				
		142	五郎衛門																		2.0.0		
		184	弥五郎																		1.4.0		
		159																		3.9.0			
		168	/																	0.7.0			
		(未達)	171																	5.7.2			
	秋本年賀高 台計	63.8.5.0	2.1.2.0.0	正	4.14.5.5	7.1.7.4.0	6.1.0.0.0	6.2.5.8.5	4.4.8.2.0	7.1.4.4.0	7.1.4.5.5	7.0.0.0.5	7.1.7.9.5	7.0.5.8.0	6.8.4.5.5	7.5.7.5.0	7.5.7.5.0	6.2.9.2.0	7.5.7.5.0	7.5.7.6.0	7.5.7.5.0	54.4.9.0	
	*単位(石斗.升合.タ)																				7.7.8.0.5	6.4.1.0.0	4.8.5.9.0
	※正・預所引造分含む																						
	納入年	28口	9口	5口+盆米	23口	23口	25口	26口	33口	29口	23口	17+口	27口	32口	35口	28口	32口	35口	32+2口	33口	27口		
	預所	宝光坊	柴屋坊	奥坊	東内坊	漆本坊	批杷本	平門坊	奥坊	批杷本	東内坊	平門坊	奥坊	批杷本	宝光坊	奥坊	批杷本	并公	奥坊	批杷本	宗勢		
		増秀	宗秀	豊田	宗信	宗勢	盛内	宗秀	宗勢	盛内	宗秀	宗勢	宗秀	宗勢	宗秀	宗秀	宗勢						
	秋本年賀	永正元年秋	永正3年秋	永正15秋	永正10秋	永正13秋	永正14秋	永正15秋	永正16秋	永正17秋	大永元秋	大永2秋	大永3秋	大永4秋	大永5秋	大永6秋	大永7秋	天文1秋	天文2秋	天文3秋	天文13秋		
	注進日	永正2.6.3	永正4.8.1	永正6.6.1	永正11.8.1	永正14.8.1	永正15.8.1	永正16.8.1	永正17.8.1	永正18.8.1	永正1.8.1	永正2.8.1	永正3.8.1	永正4.8.1	永正5.8.1	永正6.8.1	永正7.8.1	(第4種)	第5種	第6種	第7種		

めで、合戦終了後に乾家館としたのではないかと推測されている。方便法身尊像を最後まで乾家が守っていたという理由による（免山 篤1999 p.383）。

免山氏が千提寺における乾家を石山合戦時代から
続くと古く考えられるのは、車作文書寺邊村の項に
⑯「國近 乾大夫」の記載が見えるからである。大夫は、有力名主家がもつ名称である。高山莊納帳では大半の家に付されていた。しかし、車作文書では本来の意味で付されよう。同文書で大夫名称をもつのは、乾大夫の他に寺邊村の⑰南大夫、音羽村の⑲東大夫の計3名主家だけである。寺邊村⑰南大夫は、清水寺の六坊の一つであった車作の居住家を推定している。

乾屋敷遺跡（跡地）については、免山氏の報告によれば、敷地は東西100m、南北70m位、比高40m。上面の平場は東西65m、南北15m位で、北と東に土壘が廻る。北側の土壘は高さ5m、幅4m位。東南の隅は一段高くなつて櫓台状に造られる。住居のあった平場の東部は小土居（土塀か）で区切られ、中央に円形土坑がある。西方の区画中央には泉水か

と思われる石組みを残す。泉水は一般百姓の屋敷には見られないものである。入口は南側の谷筋より小径が中位居住区の上に通じる（免山 篤1999 p.381）。

乾屋敷は、車作文書に記された時代には、やはり城砦であったのかもしれない。しかし、そうなると、乾大夫家自体は、当時、寺邊村の別集落に居住したと考えた方が良いのではなかろうか。

それでは、車作文書の乾大夫家はかつては何処に居住したと考えられようか。例えば、現在、乾姓は、五ヶ庄では車作、泉原、佐保などにもあり、豊能町では有力名主家として散見される。安威にもある。しかし、車作文書における主体は寺邊村車作のようである。車作でみれば、集落の北西部、字名「乾」（戌亥：北西の意）に現在も同姓家が居住されている。安元、泉原、佐保など周辺部の浄土真宗寺院が（東）大谷派であるのに対し、同じく車作の字名乾にある法林寺は、千提寺惣道場と同じく（西）本願寺派である。そして、さらに北西方向に字名清水があり、かつて清水寺六坊が所在した。また、車作文

〈翻刻〉車作文書（大阪府茨木市車作伝来 忍頂寺五ヶ庄名田・名主書上文書断簡）（個人蔵）

⑥⑩⑤⑧⑨④ 重新宗守國 宗屋貞安安 名分名名名	泉原村	53 51 49 47 45 43 41 39 37 35 33 31 千龍宗宗長重秋武五末徳□ 代寿信末命永成成郎延代成 名名名名名名名丸名名名	音羽名主中	30 28 26 24 22 20 18 16 專貞安重助宮有末真恒末成良善貞 當滿元里丈恒國次徳元元貞與名 名名名名名名名名名名名名名名名名	寺邊村名主中
井手窪西清 ノ衛門水 上門尉		東大塩木大志東小坂 上田ノ路め大坂 下向ノ夫 井下司 （※不明）		/ 中 / 清水林北麹屋 西 池坊 龜太鳥下龜破上上居司破谷 （13）寺林	
京真安為國 与里元成貞 名名名名名		52 50 48 46 44 42 40 38 36 34 32 恒久行守行石宗徳高行□ 元末包國（カ）丸清政富（カ）名 名名名名名名名名名名		29 27 25 23 21 19 17 中清千成末國宗（14）京並太薬恒國 井水代包友近北浦 名名名名名名名名	
小峯林北守 井ノ浦谷 手掃部		今永 / 清坂本惣早同名下司 西谷新や太郎坂扱栗井關太神専當 院	（↑縦断）	// 法麹龜乾南下 住屋破大夫夫方小方 下大坂北藤兵、衛 中屋 （15）寺司方龜破	

※順番号は、本稿で便宜的に与えたものである。

（財）大阪府文化財調査研究センター 1999より転載（一部改訂）

書では、⑯末次名、⑰末友名を除くと、⑯～㉔まで車作の古い居住家の名田が並んでいる。⑲國近乾大夫は、この中にある。

千提寺における庄屋としての居住開始年代は不明であり、また、もちろん、代替わりも考えられるが、千提寺西側庄屋乾家の前身は、やはりこの車作文書の乾大夫家であると考えてよいのではなかろうか。
 ②中屋大夫家 高山莊納帳でみると、一統は、No.13の099左近太郎（これは別にNo.7の068左近太郎もある）、No.20の中屋衛門家があるが、いずれも1回限りの貢納である。しかし、納帳No.2から最後のNo.22まで、常に上～中位くらいで年貢を払ってきた安定した貢納家。一統は結ばないので、地侍ではない。あるいは他村にも同族があるように見える。

車作文書では、寺邊村名主中⑧太郎丸名中屋が、高山莊納帳の「中屋大夫」と同族に見える。千提寺中屋（現姓・中谷）一統のうち遺物所蔵家で一番古い一括遺物をもつ家の屋号がナカヤである。ナカヤは、居住地設定でも、中谷姓の中で一番谷部耕作地に近い場所に旧々住家があった。千提寺の同姓は、古い家が低位にあり、分家は上にという山間部集落開発の居住地設定原理が働くようである。

乾家同様、車作文書の段階で千提寺居住家であったかどうかは不明である。しかし、寺邊村の項にあり、また、中位居住区近くの字名滝尻に、丘陵尾根

を利用した佐保クルス山墓地の小型版、高山右近のキリシタン布教以前かと思われる通称「墓の丸」と呼ばれる墓地が現在も眠っている。一石五輪塔や阿弥陀石仏が顔を出している。滝尻山は、もとはナカヤノヤマと呼ばれた。小尾根にも広がりが見られるようで、1軒墓というよりは、同族墓、あるいは惣墓の可能性もある。したがって、現・ナカヤ家（まさか左近太郎家か）は、車作文書作成段階で千提寺に居住されていた可能性が高いと思われる。

乾屋敷は、上位居住区に通じた丘陵上にありながら門は南側にあり、現況では中位居住区に通じる。中屋一統は、法住院がある千提寺が集落として成立した開発名主の中心家ではなかろうか。

③東大夫家と千代名東家 高山莊納帳における016東大夫家は、No.1～No.21まで年貢が払われる。104千代は、No.14（大永3年）の1回限りの貢納である。しかし、016東大夫家も、大永年間までは途中が抜けることが多い貢納家である。周辺部の一統家の一族のうちが結合を求めて移住、あるいは加地子得分権を得ただけのような不安定な状況がうかがえる。

車作文書では、寺邊村名主中に⑮千代名法住院、音羽名主中に⑭秋成名東大夫、⑯千代名東が見える。いずれも、千代名あるいは名主名東が共通し、一統であることを連想させる。すなわち、車作文書でみると、寺邊村千代名の法住院は千提寺にあり、後世

にキリストンであったために再興されなかつた千提寺（もとは寺山に所在したのか）と村名の基になつた寺であろうか。法住院は千提寺に耕作地千代名があつた。そして、音羽村の東が千提寺法住院の名主名に共通か。また、音羽村秋成名東大夫は、大夫名をもつ有力名主層であり、したがつて、千代名東はその一統と考えた次第である。

また、合わせて、高山莊納帳の104千代は、この音羽村名主中の千代名東を省略したもののようにみえる。すなわち、高山莊と音羽村の東姓一統は同族関係で、車作文書における東大夫が有力名主家というのは高山莊との関係も含んでいるのであろうか。しかし、104千代は、音羽からの出作など、むしろ主体は音羽村にあると推測することはできないか。

現在、東姓は千提寺にあるが音羽村、また高山莊にはない。先に述べたように、下音羽村は1姓しか車作文書とは共通しない。古いと見られる現在の居住家も、姓を変更されたか、その後に転入された状況に見える。東大夫・東は、車作文書段階では音羽村の居住家であるが、文禄検地時（極端に云えば板倉氏の検地時）の村切り、高雲寺の建立などでその後に一統として千提寺に転出されたのではないか。

これら動向は、千提寺の下音羽に続く不定形の細長い飛び地が語るようである（共有山を除き、東一統所有地が主体）。下音羽と千提寺は、この飛び地によって一続きになっているのである（図2）。また、この飛び地共有山には、「松谷お城ダイ」（右近の城跡か）、「高山屋敷」という高山莊・右近関係字名かが付されるのも、周辺部では実は本地だけである。

なお、千代名東は現在オクンジョと呼ばれる久嗣家、秋成名東大夫はヒガシと呼ばれる鹿男家に比定できるのではと考えている。オクンジョは寺山、また、明治年代までクルス山の地主であった。クルス山は、遺物発見時の当主東藤次郎氏弟栄次郎氏が現・中谷悟家に養子に出た際、割譲された。オクンジョ耕作地ドノカミと居住地は、ヒガシ耕作地柳田と居住地の上位にある。やはり、屋号ヒガシと呼ばれるのが東姓一統の長ではなかろうか。

④その他の名主家 中井名は、車作文書寺邊村名主中に記される。原文書ないし写作成時の新名で、名主名も名田と同じ中井であると思われる。現在、安元の字名に「中井垣内」が残っている。高山莊納帳には記載はない。

上大夫入道家、ユリ大夫家、伝承屋敷地名の下（霜

大夫家、大上（大植）大夫家、いずれも高山莊納帳に記載される。上大夫家は他家にない入道名をもつ。一党も多く、上方、上殿の称号をもつ場合もある。15世紀末かと考えられている「高山莊百姓衆申状」（勝尾寺所蔵 箕面市史編集委員会1972 史料1184）では、高山氏によって公事を絡め取られた一番目の屋敷として記載される。ユリ大夫家、下大夫家も同様、当時の高山莊では有力家であった。彼らは、高山氏の対抗一統か、あるいは最終的に高山氏に与した一統であったのか。大上大夫家は、東大夫家同様、高山莊との結合を求めて出作されていた周辺部地域の有力家と思われる。上家は、屋号コヤマジョである。後述コヤマジョウの中心家であり、高雲寺檀家でもある。高雲寺建立や、板倉氏役知までの千提寺転入家かとも思われるが、確証はない。

なお、千提寺の古い居住家は、各一統単位で、高雲寺の他に幾つかの寺院の檀家に分かれている。この寺院の違いで、千提寺に転入されたおおよその年代がわかるのかもしれない。今となっては不明であるが、近世期に千提寺に居住された家々は、やはり、元はすべてキリストンであったのではなかろうか。

そして、両史料に記された、現在も千提寺居住の東・中谷の2姓、加えて、車作文書音羽名主中④行（カ）一名太神一統（下音羽）の3姓が、のち、キリストン信仰布教に関わる品々を教会から下賜された家々となった。なお、昭和5年に下音羽で発見されたマリア十五玄義図所蔵原田家については、両文書に記載がないので本稿では不明。太神は高山莊納帳には記載されない。不明点は、今後の調査に譲りたい。

以上のように、前代の2史料を確認することによつて、千提寺、下音羽の関係と、キリストン構成者を理解する糸口が見つかったようである。

4. 千提寺集落の新たなる歴史像をもとめて

（1）高山莊周辺部地域研究の重要性

高山莊に対する、五ヶ庄、能勢の郡（東能勢）との地域間交流は、それぞれ高山右近領となつた1578・1582年から始まると推測していた。しかし、勝尾寺と周辺部集落の結びつきは古い。大鳥居造営費用の勧進などを通じて南北朝以降とくに強まつたとされる（田中文英1987 p.201）。高山莊の地侍高山氏は、1400年代後半に頭角をあらわし、高山莊納帳が1545年で終わるのは、高山右近の父飛驒守が高山莊を奪つたからとされる。そして、高槻城主となり、戦

国大名家として、変転はするが戦国の世を生き抜く。高山氏を生み出した高山庄は、山間部地域の当時の傑出した中心地であったのだろう。

高山庄は、徳川時代の五ヶ庄が板倉重宗領に、そして、間に少し幕府領を挟むが、永井家領となった段階を通じて、確実に五ヶ庄に組み込まれた（村田路人1987 p.262・267）。大正年代に千提寺・下音羽のキリスト教遺物が発見された時、高山は、奇しくも、佐保・泉原・千提寺の4村で三島郡清渓村を構成していた（下音羽は見山村）。後、昭和30年4月には茨木市に組み込まれたものの、わずかに2週間程で大阪府豊能郡東能勢村大字高山となる。高山は、1633～1955年の320年余、五ヶ庄との関係が続いたのである。反対に、五ヶ庄が中世末期以降、如何に高山庄との関係が断ち切れたかということにならうか。

以上の点で、五ヶ庄、能勢の郡の各集落についても、高山荘納帳を中心に、まず、高山荘との関係をみると、地域の歴史を見直す一つの視点になるのではと思われた。

(2) 茨木キリスト教集落の成立と清水寺口ケ

右近は、^{天正}元亀6(1578)年、織田信長から五ヶ庄を加増される。しかし、忍頂寺に安堵状を出していた信長に対し、五ヶ庄へのキリスト教布教は遠慮したと云われる。天正10(1582)年、本能寺の変で信長が亡くなると、翌天正11(1583)年から3年間、五ヶ庄に対する集中布教が行われた。この時、忍頂寺が教会に改造されたと「フロイス日本史」は記す（松田毅一・川崎桃太訳2000-4 p.17）。そして、天正13(1585)年、右近は明石移封、五ヶ庄は茨木城代官安威了佐の管轄下に入ったのである。

ここで、清水寺口ケ（口ケは洗礼名。岩の意。すなわちペトロ。三俣俊二氏教示による）を登場させたい。「フロイス日本史」では、安威氏の段階、かつて一向宗の信徒であった人々にキリスト教信仰に対する動搖がみられたが、高槻山間部にも司祭を定住させ、これを一番喜んだ熱心なキリスト教として記述される。彼は、右近の段階で司牧をうけたもと仏僧で、かつては清水と呼ばれた一寺院の長を勤めた（当時、すでに清水寺は廃寺であった）。彼がこの地のキリスト教宗団を立派に守護したので、同地方に司祭がいなくとも土地の信徒たちは常に堅固に信仰を保っていた。彼は、教会（清水寺）のそばの自宅を明け渡し司祭を住まわせ、自分はずっと遠く

に移り、万事につけ教会への奉仕を旨とした（松田毅一・川崎桃太訳2000-3 p.202～204・270）。

高山庄での高山家ももとは一向宗であった。1560年代に飛騨守母も浄土真宗俗道場をキリスト教堂に改修したという。茨木キリスト教集落成立前夜の同宗の動きを見ると、元亀元(1570)年から織田信長と石山本願寺の戦い（石山合戦）が続く。天正8(1580)年、石山本願寺光佐（顯如）は信長と和解、石山を退き、合戦は一応の収束をみる。合戦終了後、五ヶ庄門徒一揆衆の長であった乾大夫は、右近の時代の司牧を受ける。高山荘と早くに関係があった千提寺周辺の人々も同様である。約10年後、彼が千提寺に再び来所したのは、清水寺や車作の地を教会に明け渡した後の行き先であったのだろう。そして、秀吉文禄検地後か、徳川幕府庄屋制のもと、五ヶ庄門徒に下された方便法身尊像を抱え込みながらも、清水寺口ケ=乾大夫家が代々、千提寺の庄屋を継いだのではなかろうか。

1596～1616年のイエズス会年報によれば、高槻山間部に関する特別な記述は、すべて、千提寺・下音羽のことのようである。教会側は特に熱心なキリスト教集落の動向を非常に気にしていたのではなかろうか（H. Cieslik S.J.1976 p.86～88）。

しかし、チースリク神父は、清水寺口ケについては、一切、記述されない。「フロイス日本史」旧版註では「高尾孫兵衛口ウケイ」が清水寺口ケの本名参考例としてあげられる（松田毅一・川崎桃太訳1978 p.280）。車作文書が活字となったのは1999年（井藤暁子1999-2）、チースリク神父が帰天されたのは、その前年であった。

また、口ケの年代は教会史として狭間の時。フロイスは1592年にマカオへ行き、天正遣欧使節の記録作成。1595年に長崎に戻り「日本史」を書き上げる。1597年に26聖人殉教事件をまとめる。同年、長崎のコレジヨで帰天。以降、キリスト教関係は、教会側の年報や書簡に頼ることになる。眞偽の程が云々される高槻安満淨誓寺旧蔵文禄3(1594)年のキリスト教活動日誌「キリストン・カレンダリヨ」（高槻市史編さん委員会1973 p.608～615）もこの年代にあたる。

千提寺では、車作文書の時代、すでに述べたように中谷姓が開発名主家であった。東姓も寺山の法住院（もとは忍頂寺子院か）周辺の山手地域の開発に手を染めていたと思われる。しかし、東姓の千提寺居住自体については、車作文書の次の時代であり、

先に述べたように遅れたようである。

彼らは有力名主家を中心とした信仰の組を作り、巡回してくる教会の神父たちと繋がっていた。禁教期になると、それらが仏教組織の講のようになって、カクレながらも信仰を続けていたのだろう。

千提寺には、現在、中谷姓3軒、東姓1軒、計4軒の遺物所蔵家がある。遺物をみると、中谷姓3軒では、1590年代から1600年代少し頃までの製作品をもっている。東家は、ザビエル列福記念メダイをはじめとして、ザビエルの列福(1619年)、列聖(1622年)に関わる品々が中心で、1600年代でも少し遅れた年代(1610前後~20年代か)の製作品であると考えられる。聖画においても、中谷姓は銅板など金属板油彩の和製作品、東家は中国産輸入品と思われる竹紙(武田恵理さん教示)に描かれた軸装の和製品を中心という、おそらく年代差と考えられる違いがある。

キリスト教集落成立に関しては、まず、千提寺に定住していた中谷姓の一統が各、信仰に関わる一括遺物を下賜された。一方、東姓の法住院に対しては、1591年教皇グレゴリオ14世像メダイが下賜されたようである(東家開けずの櫃内発見品)。このメダイは、地域の村長格、キリスト教頭にあたる人に対して与えられた特別なメダイ(H. Cieslik S.J.1976 p.91~94)で、開けずの櫃内の他の品とは所属年代が違っているようである。また、「フロイス日本史」記述から云えば、このメダイは、実は、清水寺のロケがもっていたとも考えられないか。グレゴリオ14世像メダイ、聖年記念メダイ、ザビエル列福記念メダイは、おそらく他のメダイに比して特別な意味を持つ司牧のためのメダイであったはずである。しかし、真相は不明。伝承もない。東家は、明治30年代の自宅火事騒ぎで、3箱あった開けずの櫃のうち2箱が失われたという。失われた中身が多く歴史を語るはずであった。

中谷姓の3軒は、やはり、千提寺成立当初のキリスト教組織を残しているかに見える。長崎県での調査によれば、カクレキリスト教の組織は、基本的には、①神を守り、行事を執行する役、②洗礼役、③行事の補佐・連絡・会計係、以上の三役がある。また、長崎市内の浦上キリスト教は、これら三役を、①惣頭(帳方)、②触頭(水方)、③聞役と呼んだ(宮崎賢太郎1999 p.8・15)千提寺では名称不詳。

遺物の遺存状況から、これら役割を当てはめると、①中谷 光家、②中谷 孝家、③中谷 悟家のよう

にも考えられるが、遺物と家との関係については、いずれ再考したい。

茨木キリスト教集落の成立については、従来から高山庄や、高山右近との関係が云々されてはいた。しかし、千提寺、下音羽が守ってきた遺物が優品で、しかも、数が多いため、集落の名主層(有力農民層)が下賜されたという考えは、『彩都報告書』1999年刊行以前には唱えられてはいなかったと思われる。

(3) 近世禁教期のキリスト教組織

中谷一統の遺物と比較し、新しい年代に所属する可能性が強い下音羽の遺物をみたい。東家遺物、また、現在も下音羽に居住の大神家・原田家遺物の種類・おおよその年代的な共通性は、銅版画8枚組セットの1枚が東家に、5枚が大神家にあること、さらに、マリア十五玄義図が東家、原田家にあることなどからうかがえる。あるいは、これら下音羽の遺物は、先の寛永10(1633)年事件の司祭たちが託して去ったものであるのか。

禁教が進む重宗役知以降は、千提寺、下音羽とともに、三役の表立っての役割も無くなる。下音羽に残った大神家も、三役を兼ねるようである。

海老沢有道氏によれば、キリスト教の盛んであった地域では、キリスト教の民間指導者と、徳川幕府村方制度の庄屋などは重複した人物が選出されると指摘されている。すなわち庄屋は、幕府側へはキリスト教がないと証言し、その共同体を守ることが出来る。「潜伏」(カクレキリスト教)も可能となる。幕府側にあっても、これがなければ村方は治まらず、幕府治世は困難になるからである(川村信三2003 p.287)。千提寺の庄屋としての乾家選任も、これが意図されたものであろう。

近世寛永10年以降、板倉家役知となった五ヶ庄のうち千提寺の集落構成は、庄屋乾家以下、次のようなものではなかろうか。下音羽の東姓一統も、この時には千提寺に転入していたはずである。

千提寺は、中谷姓一統の組も変わらず続く。東家は、旧寺家でもあり、キリスト教時代においても、むしろ、千提寺より広い範囲でのキリスト教徒たちを対象に受け入れていたのではなかろうか。それが、佐保カラ、上野マリヤなど周辺部の地名や名字をもつ碑(墓地に全体的に祀られたマリア像のようなものか。個人墓碑は石や木製十字架などか)が寺山・クルス山に、また、高雲寺に隠された状態で発見された理由ではないか。また、板倉氏以降、とくに永

井家以降は、キリストン時代の組を引き継ぐ三つの個別組織が確立したのではなかろうか。

近世禁教期の組織として、ここでやっと、ジョウが紹介できる。千提寺には、「居住区とつながるが、しかし、居住区名称ではない」という弓講・伊勢講の講分けがある。ウエダイジョウ（上田（代）條）・ナカイジョウ（中田（代）條の略）・コヤマジョウ（小山條。箕山垣内とも）の3ジョウで、1ジョウに3つの姓の家々が所属（五人組制度を構成）したのが基本のようである。ダイは、佐保村「文禄検地帳」での「田」が、後世に「ダイ」、「代」と変化する場合があるという（免山 篤氏の教示。（財）大阪府文化財調査研究センター 1999 p.242）。名称からも、ジョウは近世期のものと考えられようか。ジョウは、村内で転居しても、旧ジョウのままである。この点が垣内など居住区分名称とは異なる。したがって、ジョウは、一般的には組と呼ばれる信仰組織の名称の名残かと思われる。長崎県生月島のカクレキリシタン組織の一集団を垣内と呼ぶ（中園成生2000 p.19）のに通じるのであろうか。

以上の各ジョウは、それぞれ、カクレキリシタン、キリストンからの早くの改宗家の二者を含む。千提寺、下音羽というと、キリストン遺物所蔵家を含むカクレキリシタンだけがクローズアップされてきた。しかし、この集落には、早くの改宗家でもあり、実はカクレキリシタンでもあったかもしれない庄屋に加え、一般の改宗家も早くから共存することで、対外的にも千提寺の調和は保たれ、秘密が守られる形になったのではなかろうか。さらに、この仕組みの立役者は、京都所司代板倉重宗であったのでは。

先に述べた近代の風と、これを受けたような乾家の廃絶によって、千提寺のカクレキリシタン家は解き放たれ、明治後半、1800年代末以降、仏教石塔を立てだし、実質的な改宗家へと変わり始める。東家は明治38(1905)年。庄屋乾家が廃絶した10年後位にあたる。そして、その後の大正年代のキリストン遺物確認を渋々ながらも時宜を得たものとして受け入れられたのではなかろうか。

(4) 今後に向けて

高山荘納帳、車作文書というキリストン時代の前代史料から、さらにキリストン集落が成立した時代、さらに徳川幕府禁教期を経て大正年代の遺物発見に至る時代を、以上のように推測を重ね概観した。表題に関わる乾家は、明治の廃絶後、古くは一統であつ

ただろうが、別系の乾家が継がれている。

本稿でとくに強調したいと思ったのは、千提寺・下音羽が、当時のキリストン教会の布教に関わる我が国最後の重要品といえるような品々を託されたのではないかということである。信仰用具は、力尽きた司祭たちが偶発的に置いていったものではなく、意図的に、実は、高山右近の布教成果である千提寺・下音羽に託されたと推測したい。

そして、禁教期の両集落は、徳川幕府側からカクレキリストンと転宗家によって調和を保つ村方治世を見本にしたような集落を仕組まれたものではなかつたのかと推測したが、理由は板倉重宗側にもある。五ヶ庄が重宗役知となつたしばらく後の寛永15(1638)年、島原の乱初戦で、重宗弟幕府上使板倉重昌はあえなく討死したからである。キリストンと幕府との関係、また弟に対する非難を避け、全体を円満に如何に収めるかが重宗にとってやはり課題であったのではなかろうか。

千提寺、下音羽は、現在も、1500年代から変わらぬ摂津山間部としての歴史・地理環境の中にある。しかしながら、千提寺は、地元業者の土採りによる地形改変が進み問題になっていることも事実である。今回の環境大変化を機会に、千提寺、下音羽は今後、どのように歩もうか、地域活性化を目標に、より良い方向性を求め、地元は悩まれ相談してきた。今後は、「茨木キリストン遺跡、ザビエルの里」としての歴史性を追求した町づくりを目指されることになるだろう。

茨木キリストン遺跡の研究は、茨木市を含む右近関係地域の市史段階で留まっている。しかし、千提寺・下音羽を含む北摂地域の歴史は、何よりも、まだまだもっと、非常に奥深いものである。これら地域の歴史探究が、茨木キリストン遺跡の存在意義をも高める方向になることに期待したいものである。

さしあたり、寛永10年事件の実態を確認したい。さらなる歴史像の解明をめざし、幅広い多くの方々の支援を求めたい。

参考・引用文献

井藤暁子1999-1 「千提寺・下音羽のキリストン信仰」

（財）大阪府文化財調査研究センター 1999

井藤暁子1999-2 「中世の忍頂寺五ヶ庄の名主層」

（財）大阪府文化財調査研究センター 1999

井藤暁子1999-3 「車作の清水寺縁起」

- (財) 大阪府文化財調査研究センター 1999
 茨木市史編纂委員会1969 『茨木市史』 茨木市役所
 茨木市史編さん委員会2004 『新修茨木市史』 第8巻
 史料編地理 茨木市
- (財) 大阪府文化財調査研究センター 1999
 『彩都(国際文化公園都市)周辺地域の歴史・文化総合調査報告書』 調査報告書第40集
- 奥田康雄1975 「千提寺教会とビロース神父傳」
 『會報』第17年第1号 キリスト文化研究会
- 奥野慶治1935 『綜合清渓村史』
 清渓尋常高等小学校(復刻版(1988)による)
- 川村信三2003 『キリスト信徒組織の誕生と変容 -「コンフラリヤ」から「こんふらりや」へ』
 キリスト研究第40輯 株式会社教文館
- 国書刊行会編1970 『続々群書類従』第12
 (株) 続群書類従完成会
- 高槻市史編さん委員会1973 『高槻市史』第3巻史料編Ⅰ
 高槻市役所
- 高槻市史編さん委員会1974 『高槻市史』第4巻(1)史料
 編Ⅱ 高槻市役所
- 高槻市史編さん委員会1977 『高槻市史』第1巻本編Ⅰ
 高槻市役所
- 田中文英1987 「第4章 中世の豊能地方」 豊能町史編
 纂委員会『豊能町史』本文編 豊能町
- Huberut Cieslik S.J. 1976
 「高山右近領の山間部におけるキリスト教・布教・司牧上の一考察 -」 キリスト文化研究会編
 『キリスト研究』第16輯 吉川弘文館
- 豊能町史編纂委員会1987 『豊能町史』本文編 豊能町
 長崎県教育委員会1999 『長崎県のカクレキリスト教 -』 調査
 報告書第153集
- 中園成生2000 『生月島のカクレキリスト教』
 生月町博物館・島の館
- 中谷 栄1999 「付図 茨木市千提寺民俗地図」
 (財) 大阪府文化財調査研究センター 1999
- 中西裕樹1999 「摂津国北部の一山間村落と小規模城郭 -」
 『高山の事例 -』『中世城郭研究』第13号
- 中村博司編2007 『よみがえる茨木城』
 清文堂出版株式会社
- 西村 貞1958 『南蛮美術』 講談社
- 福富照尚1997 「忍頂寺と寺辺村五ヶ庄」
 『安威川総合開発事業に伴う文化財等総合調査中
 間報告書』 調査報告書第9集 (財) 大阪府文化
 財調査研究センター
- 松田毅一・川崎桃太訳1978 『フロイス日本史』5 五畿内
 篇Ⅲ 中央公論社
- 松田毅一・川崎桃太訳2000-3 『完訳フロイス日本史』3
 織田信長篇Ⅲ 中公文庫 中央公論新社
- 松田毅一・川崎桃太訳2000-4 『完訳フロイス日本史』4
 豊臣秀吉篇Ⅰ 中公文庫 中央公論新社
- 松村菅和・女子カルル宣教会訳1999 『パリ外国宣教会年次
 報告 4(1912~1925)』 聖母の騎士社
- 箕面市史編集委員会1964 『箕面市史』第一巻(本編)
 箕面市役所
- 箕面市史編集委員会1972 『箕面市史』史料編二
 箕面市役所
- 宮崎賢太郎1999 「第2章 長崎県のカクレキリスト教(総
 説)」「第3章 長崎地方のカクレキリスト教」
 長崎県教育委員会1999
- 村田路人1987 「第5章 近世社会の形成」 豊能町史
 編さん委員会『豊能町史』本文編 豊能町
- 免山 篤1999 「考古資料よりみた清渓周辺」
 (財) 大阪府文化財調査研究センター 1999
- 免山 篤・井藤暁子1999 「水利・その他現地調査の成果」
 (財) 大阪府文化財調査研究センター 1999
- 本稿作成にあたり、三俣俊二(聖母女学院短期大学元教授)・村田路人(大阪大学教授)・免山 篤(茨木市文化財保護審議会元委員)・島田竜雄(箕面市立郷土資料館元館長)・武田恵理(修復研究家)・東千代子(キリスト教遺物所蔵家)・東満理亞(茨木市立キリスト教遺物史料館)・中谷早苗(同)・福田 薫(箕面市立郷土資料館)・楠本公子(箕面市役所)・中西裕樹(高槻市立しろあと歴史館)、地元千提寺など、多くの方々のお世話をした。
- 卒業後2年目で考古学の世界に入った時から、所属機関と坪井先生とは何がしかご縁があった。1999年、箕面市・茨木市の「彩都国際文化公園都市歴史・文化総合調査」が終わった時、事務局担当としてキリスト教遺跡にはまりこんだ私は、当時理事長であった坪井先生に何らかの形での調査継続を言上に及んだ。無理だろうとは判っていたのに。そして今、キリスト教でない私が個人的にではあるが、この調査を楽しみ、かつ悩んでいます。今更ながら1999年、さらに今回本稿作成の契機ともなった先生に深く感謝しています。
- (いとう あきこ)